

# 映画を事例シナリオとして活用したPBLの実践

瀬戸 美奈子

三重大学共通教育センター  
大学教育研究—三重大学授業研究交流誌—  
第 22 号 別 冊  
2 0 1 4 年 発 行

## 映画を事例シナリオとして活用した PBL の実践

瀬戸 美奈子

### 1 はじめに

「心の法則発見・適応とは何か」(PBL セミナーF)は、事例シナリオをもとに問題を考える中で、心理学的知見に基づく発達と障害についての理解、さらに家族、社会という観点から適応と援助について多角的に考えることを目的とした授業である。

PBL 実践マニュアル(三重大学高等教育創造開発センター)は事例シナリオに求められる要件として以下の4点をあげている。

- ①問題は、現実社会で実際に起こっている問題で、学生の興味を引くものであること
- ②学生自身が考え、意思決定や判断することが求められる問題であること
- ③学生自身が必要な学習項目を発見し、その学習を学生に求めるものであること
- ④学生が段階的に思考を深めていけるよう、複数の段階で構成された問題であること

映画を事例シナリオとして用いる理由として2点ある。まず第一に学生がこれまで楽しむものとしてとらえていた映画という題材が、臨床心理学や発達心理学の観点を用いて分析することによって新たな発見があることに気づくことができる。第二に映画の分析から、個人の心理をとりまく家庭、社会という広い視野から課題を設定し、人間の適応について思考を深めていくことが可能であると考えた。また事例シナリオにおいては事例を段階に分け提示していくことが作成のポイントとされており(三重大学高等教育創造開発センター)、ストーリーにそって段階的に情報を提示できる点においても映画を事例シナリオとして活用することができるといえる。

映画を事例シナリオとして用いる試みは、精神障害の理解と啓蒙を目的とした取り組み(長崎大学医学部)があるが、心理学分野で系統的に行なっている授業実践はまだない。筆者は映画を事例シナリオとして用いて、検討させる試みを昨年度の共通教育「心理学Ⅱ」で実施した(瀬戸,2013)。心理学Ⅱでは毎時間、異なった映画を視聴し、学生は教員が提示する14本の事例シナリオ(映画)を分析する。最終回は学生が一般の映画を分析観点とともに紹

介し、推薦した中から受講者の投票によって映画1つを選び、全員で分析する、という展開である。毎時は①前時の補足と本時のテーマについての教員の解説(20分)、②映画視聴(30分)、③グループでのシナリオ分析(20分)、④分析のまとめレポート執筆(20分)で1コマを構成した。しかし、共通教育の実践においては受講者数の問題(90名、60名弱の2クラス、TAなし)と、広く心理学の知見を身につけるといふ授業目的から、事例について細かい分析を行うことや分析の過程で提出される学生の問題意識を深め、発表する機会を設けることが難しかった。

そこで今年度はPBLセミナーで映画を事例シナリオとし、グループでのディスカッションを中心にシナリオ分析を行い、多角的に考え、考察を深めるための学習を行うことをねらいに実践を行った。

### 2 授業の概要

「適応とは何か」というテーマを掲げ、事例シナリオを映画を用いて提示する。学生は臨床心理学・発達心理学の理論や症例について自己学習を行い、その知見をもとに映画を分析し、さらに各自の気づきから適応と援助に関する課題を発見して考察していく。そして事例シナリオから発見した課題をもとに、自己学習とグループディスカッションを行うことで、知識の深化を図り、省察を促す。具体的には①発達障害、②精神障害、③幼児期から児童期の発達、④青年期の発達という4つの事例シナリオを扱う。シナリオごとに、事前の自己学習→事例シナリオ分析→課題発見→自己学習とグループディスカッションという流れで授業を構成する。4つの事例を学習した後、考察した課題の中からグループで1つ選び、プレゼンテーション資料を作成し、グループごとに発表する。

授業のねらいは以下の通りである。

- ①臨床心理学、発達心理学の基礎的な知識を習得する。
  - ②事例シナリオを通して、発達のプロセスや障害についての理解を深める。
  - ③事例シナリオから適応と援助に関する課題を発見し、多角的な視野から考察する。
- 学習の到達目標は次の2点である。
- ①児童期から青年期にかけての発達のプロセス、障害に

ついて理解できる。

②自己学習、グループディスカッション、グループでの発表を通して、知識の習得と課題解決能力を身につける。

また Moodle を活用することによって、グループ内、グループ間でのディスカッションや課題の共有を授業時間外でも行なった。

評価については出席、授業期間中のレポート、グループディスカッションへの参加態度、最終プレゼンテーションをもとに総合的に行った。

### 3 事例シナリオ

提示する事例シナリオとして映画（「恋愛小説家」「レインマン」「ビューティフルマインド」「となりのトトロ」「スパイダーマン1・2」）を用いる。

PBL セミナーで扱う映画教材は昨年度「心理学Ⅱ」で教材として活用しており、いずれも学生の評価が高く、さらに詳しく検討してみたいという要望が高かった作品である。

「恋愛小説家」は主人公の行動と環境との関係が理解しやすく、シナリオ分析を最初に行う時に取り組みやすい教材といえる。「レインマン」「ビューティフルマインド」はそれぞれ実在の人物がモデルであり、自閉症、統合失調症としての特徴が顕著に映画の中で描かれており、症例についての知識をもとに分析しやすい教材である。そのため PBL セミナーで映画を事例シナリオとして分析する手法を学ぶための教材としての適切であると考えた。

「となりのトトロ」は幼児期にある妹、児童期にある姉がそれぞれ描かれており、対比させることによって、幼児期から児童期にかけての発達が理解しやすい教材である。また、「スパイダーマン」「スパイダーマン2」は青年期にある主人公のアイデンティティ獲得を中心に、家族との関係、友情、恋愛、将来の進路の問題がストーリーの重要な要素として描かれており、青年期の特徴を様々な観点から理解しやすい教材であるといえる。

### 4 授業展開

自己学習を含む 30 回の授業展開は大きく次のような流れになっている。

- ①前半の映画 3 本を「障害と適応」、後半の映画 3 本を「発達と適応」として大きく分けてとらえる。
- ②3 本の映画視聴と事例分析が終わったあとに設定課題についてグループ発表を行う。

③「障害と適応」「発達と適応」の観点から分析可能な一般の映画を自分たちで探す。

④一般の映画から発達や障害の観点から分析可能な映画をグループごとに 1 本選択し、実際に分析する。

⑤分析した映画をグループごとに紹介し、分析結果について発表する。

#### (1)第1回

ガイダンスを行い、授業の進め方、映画を事例シナリオとして臨床心理学や発達心理学の視点から分析することについて伝えた。受講生は 3 人から 5 人程度でグループを構成し、グループ学習を中心に行うこと、moodle を活用して意見交流を行っていくことについても説明した。

#### (2)第2・3回 導入

学生は映画を事例シナリオとして分析したことはなく、またこれまでの生活の中で映画を観るという経験も乏しい学生が多かった。そこでまず映画を事例シナリオとして分析する方法を学ぶために、「恋愛小説家」という映画をとりあげ分析を行った。

「恋愛小説家」（原題: *As Good as It Gets*、ジェームズ・L・ブルックス監督）は、1997 年製作のアメリカ映画である。偏屈なロマンス小説作家と、彼の行きつけのレストランで働くウェイトレスとの恋愛を描いている。主人公は強迫的な行動に悩まされており、周囲との対人関係もうまく築けていない。その主人公が周囲の人との交流を通して変容していくプロセスが映画の中で描かれている。

第2回では「恋愛小説家」を冒頭場面から視聴（30分）し、ワークシートを用いて主人公の強迫的な行動を、先行刺激、行動の結果との関連から分析した。

第3回では、主人公の変容が理解できる映画後半（30分）を視聴し、性格、環境、病気の症状がどのように主人公の強迫的な行動に関連しているかについて分析した。最後に主人公の行動を維持している要因や周りのサポートのあり方について考えた。

これらの作業はすべてワークシートを用い、個人でのワークシート記入の後、グループ討議を行う形式で展開している。

#### (3)第4・5回 障害と適応：発達障害

「レインマン」（原題 *Rain Man*、1988 年公開のアメリカ映画。監督バリー・レヴィンソン）は 1988 年のアメリカ映画である。「キム・ピーク」という実在の人物をモデルの制作されたと言われており、自閉症の兄とその弟との関係が中心に描かれている。自閉症の特徴を分析しながら、

家族の関わりや、障害をもった人たちが生きやすい社会のありかたについてグループでディスカッションを行った。

第4回はまず各自が自己学習してきた自閉症児の特徴についてクラス全体でまとめた後、映画冒頭から40分程度視聴した。

自閉症である兄の行動を社会性、コミュニケーション、常同性の観点から分析し、ワークシートに記入した。

その後、映画ラスト近くのシーン（自閉症の兄レイモンドが施設に戻るか、弟チャーリーと一緒に過ごしたいかを尋ねられる場面）を視聴（10分）し、弟はどのように結論を出したかについてグループごとの見解を考察した。そこから障害をもった人へのサポートについてグループ討議を行いまとめた。

第5回は、弟の気持ちの変化に焦点を当て、なぜレインマンというタイトルなのかの謎を考えながら、兄弟の交流を分析した。

#### (4) 第6・7回 障害と適応：精神障害

「ビューティフル・マインド」(原題: *A Beautiful Mind*, 監督: ロン・ハワード) をとりあげた。これはノーベル賞受賞の実在の天才数学者、ジョン・ナッシュの半生を描いた2001年のアメリカ映画である。ここでは精神障害をもった人の苦しみをどう理解するかに焦点をあてながら、主人公とその家族の行動を分析した。

第6回は映画冒頭から40分を視聴した後、具体的なエピソードから主人公の性格を分析し、主人公の苦しみはどこにあるのかについてグループで協議した。

その後、主人公が入院する場面10分を視聴し（映画では、入院場面を見るまでどの場面が主人公の妄想でどの場面が現実なのか、わからないようになっている）、主人公の症状と症状のもたらす困難さについてグループで話し合っまとめた。

第7回はビューティフルマインドの後半40分を視聴する。後半は家族の葛藤、病気への治療、主人公のノーベル賞受賞までが描かれている。主人公の病気に対する理解と、病気を持ちながら社会生活を送るためのサポートについてグループで協議しまとめた。

#### (5) 第8～11回 障害と適応のまとめ

「障害と適応」をテーマにグループごとにテーマを決めて、プレゼンテーション資料を作成し発表を行った。3本の映画から各グループごとに深めたい課題を決め、課題について学習しグループごとに発表した。

グループでとりあげたテーマは「統合失調症」「チック」などの具体的な疾患をとりあげたものや家族のサポート

をとりあげたものが多く、映画に触発されてここまでの知識をさらに発展させる方向でテーマを設定できるようになった。

#### (6) 第12・13回 発達と適応：幼児期から児童期

第12回は「となりのトトロ」を視聴した。「となりのトトロ」はスタジオジブリが1988年に制作した日本映画である。

この映画を未見の学生は受講生のうち1名のみであり、ストーリーについてはほとんどの学生が理解していた。

映画冒頭から50分を視聴し、自己学習の知識をもとに妹メイと姉サツキを比較しながら、幼児期の特徴と児童期の特徴についてワークシートに記入しながら分析した。言語発達、社会性の発達の観点から比較し、さらに幼児期と児童期の特徴をグループでまとめた。

第13回は「となりのトトロ」を妹メイと姉サツキのトトロとの出会い（10分）、後半いなくなったメイをサツキとトトロが探しにいく場面（30分）を視聴した。

トトロが現れる状況、トトロとの関わりに見られる妹、姉の発達の差異について分析し、姉妹それぞれにとってのトトロの存在意味についてグループで検討しまとめた。

#### (7) 第14・15回 発達と適応：青年期

「スパイダーマン」(原題 *Spider-Man*, 監督サム・ライミ) は2002年のアメリカ映画である。

第14回はまず映画冒頭から50分を視聴する。自己学習の知識をもとに青年期の特徴について分析する。ここでは映画を分析する観点を教師が提示せず、アイデンティティの確立のために必要な条件3つをグループで決め、それに基づいて分析するという方法を用いた。

第15回は続編である「スパイダーマン2」を冒頭から50分視聴し、自己学習の知識をもとに青年期の特徴について分析しながら、スパイダーマン1と2を比較し、主人公が成長した点、変化しない点について検討した。

#### (8) 第16～20回 発達と適応まとめ

3本の映画から各グループごとに深めたい課題を決め、課題について学習しグループごとに発表した。グループでとりあげたテーマは青年期の人間関係、中二病、幼児期の発達、イマジナリーコンパニオンなど幼児期から青年期の発達の中で特に人間関係に着目したテーマが多く見られた。

#### (9) 第21～25回

各グループが一般の映画から発達や障害の観点から分析可能な映画をグループごとに選択し、分析の観点を決めて分析を行った。

各グループがとりあげた映画とテーマは次のとおりである。「千と千尋の神隠しから見る発達」「うつ病について～ツレがうつになります。」を観て～」「ウォーターボーイズから見た共同・集団における青年期の発達について」「博士の愛した数式から～記憶障害について～」「映画『休暇』にみるストレスが子どもに及ぼす影響」

(10)第 26～27 回 プレゼンテーション準備と資料作成

(11)第 28～30 回 プレゼンテーションとまとめ

グループでのプレゼンテーションについては内容と発表の点から評価の観点を決め、受講生に評価させた。点数の高かった上位 2 グループは PBL セミナー公开发表会で成果発表を行った。

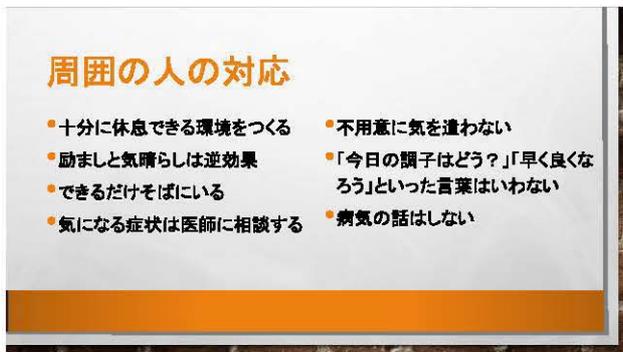


図 1 映画「ツレがうつになります。」の分析

### 青年の共同・集団

青年にとっての共同生活 …家庭、学校、職場、地域

青年にとっての集団 …クラブ、ボランティア、サークル

目的をもって皆で力を合わせて  
ひとつのことを成し遂げる

自立をよりたしかなものにし、  
社会的な当事者としての能力を高める

図 2 映画「ウォーターボーイズ」の分析

## 5 学生の反応

今回映画をシナリオとしてとりあげることで、障害や発達という人間の側面を正しい知識を持ちながらどのように理解していくかという課題にどのグループも興味をもって取り組んでいた。意欲的で話し合いにも積極的で、

関心が高かったように思える。

授業終了後に書かれた感想を紹介しながら、学生の反応についてまとめる。

まず PBL の授業を通して、他学部との学生との意見交流ができたことについて触れた感想がみられた。これは PBL そのものも授業としての特性に対する評価だと思われる。本授業で「映画」をとりあげたことについての評価は大きく二つあり、一つは分析することによって日常生活の事象を心理学の枠組みでとらえる面白さ、多角的な視点を持つ面白さにつながっていったことがあげられる。

・映画を観て、さまざまな人について分析していく中で自分の中で本当にいろんな視点、考え方が生まれたように思う。

・なんとなく観ていたのがもったいないと思えるくらい、主人公の行動などに着目してみるの楽しいと思った。自分の大好きな映画もこのような見方をしてもっとのめりこめるようにしたいと思う。

・"映画の観点を絞って観る"ということは、この授業を受講するまでしたことがなく、最初は作業が少し難しく感じました。でも観点を絞ることで一度観たことのある作品でも新しい発見をすることができたり、逆に謎が深まったりして、とても面白かったです。

・毎回のように映画を観て人の行動について分析するということは初めてだったので最初は難しく感じたけど、今振り返ってみると、小さな言動でこんなにもその人についての情報が手に入るんだと思いました。

二つ目に、映画を通じて人間の行動や心理を分析することが自分自身の成長につながったという点である。

・PBL という特殊な授業にひかれ、この授業を選びました。大学ではこんな授業もあるんだな、と驚きました。映画をただ単に観るのと分析しながら観るのでは全然違くなって思いました。私も相手がどんな風に考えているのか、感じているのかを分かってあげられないことが結構あったので、少しは相手の感情を気にして感じとれるようになったのではないかなと思いました。

・グループで話し合っ発表することだけでなく、自分自身で映画について分析し、考えることもできたので自分の成長につながったと思う。

また「適応とは何か」という授業全体のテーマについては、簡単に答えはでないようであったが、深く追求する姿勢や、その人の特性を受容しながら関わっていくことについて触れた感想がみられた。

・いろいろな人がいて、いろいろな悩みを生まれつきや病気になって抱えてしまうこともあるけれど、本人はあまりそのことについて責めたりせず、ある程度はあるがままだに受け止めることが必要で、周りで支える人はその人の特性を理解したうえで優しい気持ちで受け止めてあげて、その人にあった対応をしてあげるといいなと思えるようになりました。

・4月のことを思いかえすと「適応」ということに対してだいぶ関心をもつようになった。いろいろな映画を見ながらいつものメンバーで話し合い、様々な考察をして調べるものを決めて、他の班の人に発表することを繰り返していった結果、普段の生活からもいろいろなところに目がいくようになり、後々自分の中で考えてみたり、インターネットで調べたりするようになった。これは昔の自分では考えられないことだったので、この講義をうけて変わったと思った。

## 6 今後の課題

今後の課題としては教材に活用可能な映画教材を分野を問わず幅広く開発していくことが望まれる。そのためにも授業者が事例シナリオとして活用できそうな映画などの題材や社会の問題に目を向けておくことが必要であろう。

### 参考文献

1)三重大学高等教育創造開発センター編「三重大学版 Problem-based Learning 実践マニュアルー事例シナリオを用いた PBL の実践ー」

2)長崎大学医学部精神神経科学教室「シネマサイキアトリーとは？」

<http://www.med.nagasaki-u.ac.jp/psychtry/cinemapsychtry.html>

3)瀬戸美奈子 2013 心理学の授業における映画教材の活用 大学教育研究,21,41-45.